今、乳幼児を持つ母親が求めている子育て支援

ー金沢市子育てセンターの実践からー

ポ ー タ ー 倫 子

Ⅰ．今なぜ子育て支援か

1．働く母親の子育て支援

平均寿命が格段に伸び、世界一の長寿国となった今、日本女性のライフサイクルは変わりつつあると言える。人生50年の時代では、女性は子どもを沢山産み、育てあげることが一生の仕事であった。今のように家事労働を省力化してくれるような電化製品もなく、育児と家事に追われた生活を過ごし、それが女性の生き甲斐にもなっていた。女性の平均寿命が80歳を越えた現在では、主体的に選びとった少子出産と相まって、育児終了後にもう１つの人生を持つことになり、そのことを視野にいれたプランを組み立てることが要求されるようになった。

1992年には子どもを持つ女性の有職率が無職率を上まり、日本の母親の典型は働く母親になった。その背景には、女性の高学歴化が進み、母親であることのアイデンティティーのみが女性の生き甲斐を支えるものでなくなったことと、社会の構造の変化により、女子の労働に対する需要がこれまで以上に高まってきたことが挙げられる。子どもを育てながらも働き続けたいとする理由は、経済的必要のみでなく、家事・育児以外に自分の能力を発揮させたいといった女性の意識そのものが変化していることが指摘されている。

結婚および出産後に継続して働くことを望む女性が増加する一方、以前として出産を契機に退職する女性も多い。日本では出産・育児と仕事の両立が困難なことが他国の有職率との比較からも伺われ、25～34歳の時期にいったん減少するM字型就業構造が特徴であるが（Year book of Labour Statistics 1992、梁井 1996 より孫引)、現在はM字の底がやや上昇傾向にある（日本総合愛育研究所編 1996)。各種の調査から共働き家庭においても、夫の家事・育児時間は妻よりもかなり少なく、妻は仕事を持ちながら家事・育児をほとんど一人でこなさなければならないのが実態である。1985年の男女雇用機会均等法制定により、女性も男性並に働くことが求められてきた中で、働く女性は子育てと仕事の板挟みになっている。このような状況も原因の一端となり、子どもの数はますます減少し、平成７年の合計特殊出生率は1.42まで落ち込んでいる。

以上のような社会の変化を受けて、子育ての基盤は家庭であることを前提としながら、その健全な育成のためには社会的に子育てを支援する必要があることが論じられてきた。平成６年の文部省、厚生省、労働省、建設省の４省庁によるエンゼルプランでは、出生率低下の現状を受け、子ども自身が健やかに育っていける社会、子育てに喜びや楽しみを持ち安心して子どもを生み育てることができる社会を形成するための基本方針が打ち出された。仕事と育児の両立のための雇

用環境の課題としては、育児休業給付の実施など育児休業を気兼ねなくとることのできる環境整備、事業所内託児施設の設置促進など子育てしながら働き続けることのできる環境整備、育児のために退職した者の再就職の支援、労働時間短縮の推進の実施が重点施策として挙げられている。また多様な保育サービスの充実として、保育所制度の改善・見直しを含めた保育システムの多様化・弾力化の促進、低年齢児保育、延長保育、一時的保育事業の拡充が推進されている。

2．専業主婦の子育て支援

一方、子育て支援は仕事を持つ女性のみならず、仕事を持たない女性（専業主婦）こそ今深刻なニーズがあるとも言われている。各種の調査より[注1]、専業主婦ほど育児の心理的負担が大きいことが指摘されている。仕事を持つ女性は、社会に参画し自分の能力を生かすことで、自己に対する満足感や充実感を得ることができるが、家庭にいる女性は社会から取り残されたような焦燥感や周りから自分の価値を評価してもらえないためストレスを感じる場合が多いと言われている。

日本の企業の労働時間の長さは世界的にも有名であり、父親不在の中で母親が育児の責任を一人で担わなければならない場合が多い。都市部では地域社会のつながりも希薄であることから、子どもと二人きりで一日中生活することに息詰まりを感じるようになる。育児の孤立化が子育てに必要な精神的ゆとりを喪失させ、育児不安や育児疲れを招いている。場合によっては育児ノイローゼや児童虐待に至るケースもある。

近年の住宅事情も、子育てを困難にしている。大都市圏を中心に住宅事情の厳しい地域ほど、出生率が低い。都市化が進み、空地や野原など子どもに開かれた地域空間は乏しくなり、道路は車によって占領され、遊び場が失なわれている。都市部を中心に住宅事情が厳しく、集合住宅や高層住宅では子どもの遊ぶスペースが狭く、子どもの声が響かないように周囲に気を配らなければならない。高層住宅の場合は特に子どもの行動範囲が狭まれてしまい、発達に悪影響を及ぼすことが指摘されている。子どもをゆったりと安心して遊ばせる場所がないことが、少子化に拍車をかけているといって良い。

このような子育てをめぐる環境が、母親の心にゆとりを失わせ、子どもを育てることを困難にしていると言われている。では最近の母親はどのような意識で子育てに取り組んでいるかについて見ていくこととする。

3．今の母親の子育て意識

現代の母親の大部分は、子どもの数の減少や学歴社会により、子どもを生むまで乳幼児と接した経験をほとんど持つことがないと言われている。そのため育児についての具体的や知識や体験、心構えを持たないまま親になっていくわけである。そこで実際に子どもを生んでみると、雑誌やメディアで紹介されているような赤ちゃんのイメージとは程遠く、子育ては根気と苦労の多い仕事であることにショックを受けることになる。特に偏差値に追われ、マニュアル通りに正解を求める教育を受けてきた今の世代の親にとっては、子どもが思い通りに育たないことが苛立ちへと駆り立ててしまい、子どもを愛せない、子どもをかわいく思えないと悩む場合が多いことが指摘されている。

このような現代の母親たちのアドバイザー役を果たしているのが、育児雑誌である。日本における育児雑誌は、1980年代後半から相次いで創刊されたものが多く、妊娠・出産・育児が消費と結び付けられており、今や育児産業・ファミリー産業の発展の中に体系づけられている。これらの育児雑誌の特徴は、親を啓蒙しようというのではなく、本音を語りあう読者の声がベースになっていることである。同じような現象が、医者によって書かれた育児書の売れいきが鈍ってきたことにも見られる。育児の科学的な情報伝達よりも、同世代の育児経験者によって書かれた育児のエッセイ本や育児マンガの方が共感を呼び、売れいきが良いのである。高度経済成長後の社会の中で育った今の母親たちは、生活の質が向上したことにより、子育て中でも生活を楽しみたいという願望を持っている。そのため、育児雑誌では子育て中もおしゃれしてきれいでいる、外出や旅行などレジャーを楽しむといった今の世代が求める母親像を実現するための方法が特集として組まれている。このことは、『赤ちゃんがいるけど出かけたい　育児文化のいま』（清水、1997）の題名から伺われるように、今の母親の意識の一つの表れとして、乳幼児にたとえ負担をかけてもお出かけや旅行することが挙げられる。現に、子ども連れで出掛けるためのガイドブックが頻繁に作成されており、その中には育児サークルで積極的に編集に取り組んだものもある。

一方、子育て後の再就職や自分自身の向上のために、通信で資格を取ったり、講習会に積極的に参加したり、大学（院）に入り直すことも最近の母親の特徴である。女性の高学歴化が進み、せっかく身につけた学問を生かしきれないことで、社会から隔絶されたという意識を持つ人が多い。その代わりに自分の夢を全て子どもに託し、子どもへ過度な期待と重圧をかけている親がクローズアップされる中で、自分のために与えられた時間を有効に使いたいと勉学に励んでいる親が増えていることは喜ばしいことと言えるのかもしれない。

このような子育て家庭への支援として、前記のエンゼルプランの中では、子どもの遊び場・安全な生活環境等の整備、子育てに関する相談体制の整備等による家庭教育の充実、地域子育て支援センターの整備等が挙げられている。現在それぞれの自治体が、その地域の実態に即した計画を検討、施行している段階である。次に、調査の対象である石川県の子育て支援の実情を述べる。

II．石川県の子育て支援

石川県は人口117万人（平成６年現在）と年々若干減少しているものの、出生率は平成６年が1.58（全国平均は1.50）とやや高めである。平成７年に策定された石川県エンゼルプランによると、本県における女性雇用率は42.4％（全国37.9％）、女性就業率は53.4％（全国47.1％）、共働き世帯比率は62.7％（全国48.1％）と他県に比べ大変高い。これは、保育所の数が多いこととも関連しており、女性が働きやすい子育ての環境整備に早期から取り組んできたと言える。平成７年には459ケ所で計35,275人の子どもが利用しており、人口に対して保育所設置数の割合が非常に高いことが特徴である。

子育て支援にかかる分野は、極めて多様で個別的な対応が求められることから、行政サービスでは対処しきれないことを予測し、石川県では平成８年10月に「いしかわ子育て支援財団」が設

立された。これは県民の幅広い参加と協力を得て、家庭・地域・社会・行政が連携した広範な子育て支援事業を行うとともに、人材の養成や子育て支援指導の普及・啓発などにおいても機動的で柔軟な取り組みを進めることを目的としている。国と県が事業費を折半し、主な事業項目として、1.子育ての情報提供・ニーズ調査、2.子育て支援の人材確保・養成、3.子育て相談、4.子育て支援の広報、啓発を挙げている。

支援財団が平成9年2月に行った子育て支援ニーズ調査では、専業主婦の希望として最も多いのは「必要な時だけ子どもを預かってくれる施設の設置」が33.3%、「雨天時にも使える乳幼児用屋内遊び場の設置」が24.1%「幼児連れ用のイベント会場での臨時保育室の開設」が12.2%であった。また自由意見を書いてもらったところ「広場、公園の増加（遊具や駐車場の確保なども）」の構成比が27.5%、「保育料の軽減」が14.1%。「雨天時の屋内遊技場の設置」が10.7%であった。以上の結果より、石川県の子育て家庭への重点施策として、子どもの遊び場の確保が上がったために、本研究では親子の遊び場提供を目的に設置された子育てセンターを実態調査することにより、今後の子育て支援の在り方を探ることを目的とする。

Ⅲ. 研　究　方　法

調査の対象となる子育てセンターは、金沢市の地域子育て支援事業の一環として企画されたこども福祉課管轄の「金沢駅こどもらんど」と、地域福祉保健課管轄の金沢市駅西福祉保健センター内にある「スマイルパーク」及び金沢市泉野福祉保健センター内にある「あいあい子育てルーム」の3施設である。方法としては、筆者が9カ月（1997年5月現在）の一児の母親として実際に利用し、その時の様子や感想を日記形式で書いた記録をもとに利用の実態や親の意識を調査し、これらのセンターが果している役割を検討する。またそれぞれのセンターの担当保母に聞き取り調査を行い、施設の利用状況と課題を考察する。

参加期間は1997年5月9日より9月28日まで、3つの施設で合計10回参加した。参加時間は一回あたり1時間から1時間半であった。聞き取り調査は、各センターで1997年11月上旬にそれぞれ行った。

Ⅳ. 研　究　結　果

1．子育てセンターの概要

各センターで作成されたパンフレットと聞き取り調査をもとに、それぞれの概要を以下に紹介する。

今、乳幼児を持つ母親が求めている子育て支援

名　称	金沢市子育てセンター 金沢駅こどもらんど	泉野福祉保健センター あいあい子育てルーム	駅西子育てセンター スマイルパーク
設立年月	平成9年4月1日	平成8年10月1日	平成9年4月1日
目　的	都市化、核家族化や女性の社会進出に伴う、育児不安の増大に対応するため、親子の遊び場の提供、休日の一時保育や子育て相談を行い、子育ての支援を図る。	子育てがむずかしくなっているこの時代に、遊び場を開放し、親子のふれあいの場や友達作りの場を提供する。子育てに関する不安や悩みの相談を行う。子育ての情報交換や親を対象とした学習の機会を提供する。	親子が一緒に遊びながらコミュニケーションを深める。家庭が抱える子育ての不安や悩みを解消し子どもとの関わり方がスムーズになるよう親子の遊びの指導、子育ての情報を提供し、関連機関とのネットワークを図りながら子育ての援助をする。
対象児	特に記載はないが乳幼児とその親。小学生も利用可	0歳から6歳までの未就園の子どもと親	0歳児から就学前児童とその保護者
開館日	火曜日から土曜日※	月曜日から金曜日	月曜日から金曜日
時　間	午前10時－午後4時※※	午前10時－12時 午後1時－3時半	午前10時－12時 午後1時－3時半
スタッフ	保母とベビーシッターが各1名ずつ※※※	保母とベビーシッターが各1名ずつ	保母とベビーシッターが各1名ずつ
室内構成	プレイルーム 相談室兼事務室 乳児室（授乳、睡眠）	プレイルーム 相談室兼事務室	遊びの広場（室内） 相談室兼事務室（絵本の部屋が別にある）

※但し、日・祝日に一時保育を行っている。
※※一時保育の日は、午前8時～午後6時。
※※※一時保育の日には、公立保育所の職員が保母として交替で1名ずつ担当する。

ポーター倫子

「こどもらんど」と「あいあい子育てルーム」には、プレイルームしての部屋が設置されている。「スマイルパーク」は保健所のオープンスペースを利用しており、部屋として区切られてない。どのセンターも事務室を備えており、相談室としても利用されている。「こどもらんど」は授乳、睡眠、着替え、おむつ交換に使用できる乳児室を別に備えている。

遊具は、いずれの施設も0～2歳児を対象にしたものを中心に設置されている。①滑り台、トランポリン、ビニールトンネル、ボールプール、回転木馬等の運動玩具、②プレイハウス、キッチン、ままごと道具、電話、ぬいぐるみ等のごっこ遊び玩具、③積木、ブロック、パズル等の構成玩具、④大型自動車、ミニカー等の乗物玩具、⑤がらがら、おきあがり等の育児玩具、⑥絵本、紙芝居、パネルシアター、童謡テープ等の想像玩具である。「スマイルパーク」は設置面積が広いこともあり、プレイハウスや乗物、くぐったり登ったりできる大型遊具が複数ある。また別室に、800冊の絵本と紙芝居が設置されており、毎週水曜日に利用できるようになっている。

2．子育てセンターの実際の様子

次にそれぞれの子育てセンターの実際の様子を、筆者の記録を通して紹介する。子どもを持つ一母親として参加し、自分の子どもの様子、他の親子の様子、スタッフの関わり、遊具等の環境構成、他の母親との関わり等を主観を交えながら記録した。（記録は紙面の関係上、一部を抜粋する）

5月9日　15:00～16:00　　こどもらんど

入室した途端、スタッフや母親たちが「こんにちは」と声を掛けてくれる。第一印象は明るく清潔で気楽に利用できる雰囲気である。5か月から2歳児までの子ども4人とその母親が参加。子どもの発達のことを中心に、簡単な会話を母親たちと交わす。スタッフは、子どもの良いところ、可愛いところをいろいろ見つけては褒めてくれるのが嬉しい。K（筆者の長男）は最初躊躇していたが、中型自動車を手で動かしている男児の様子を見て、自分も同じような自動車やバスを動かすことを楽しむ。気に入ったようで、他の遊具には見向きもしない。家にはない遊具と出会えるのが嬉しい。

6月27日　14:00～15:30　　あいあい子育てルーム

5か月の子ども3人とその母親たちが参加。2人の子どもはうつぶせで頭を持ち上げ、Kがはいはいして動いている様子を眺めている。Kは滑り台に昇ったり、ボタンを押すと動物の音やメロディの鳴るおもちゃで遊ぶ。母親たちは次のような会話を交わしている。

- 子育て情報の交換（パパの育児参加度、育児雑誌を読んでいるか、昼寝の時間）
- 近くの美味しいレストランの情報。子どもを連れていけるかという話。
- 今の生活に不満で（ぼっとしている）働きたいという話。幼稚園は弁当があり帰りが早いので保育園の方が良いのではという話。
- ベビープールを購入したので遊びにきてとの誘い。

6月28日　11:00～12:30　　こどもらんど

11か月から3歳位までの子ども6人とその親。その内一人は父親。Kはままごとの冷蔵庫のドアの開けしめを繰り返す。それを見て刺激が少ないと思われたのか、シルバー人材センターの人が滑り台に誘いにくる。私がサポートしながら斜面を昇り（ひっぱりあげ）滑る。滑らせる時にお腹を押さえてあげることや物を持ちながら滑ると危ないとのアドバイスを受け、その通りやってみる。何度も繰り返すと私の方も滑らせ方に慣れてくる。

11か月の女児Mはもうあちこち歩いており、「すごいですね」と母親に言うと、「そうですか」とあまり反応のない様子。身体リズム曲の流れる中、それに合わせて体を動かすMに対して、母親は「そっちは頭でしょう。お尻はこっち」と指示する。また「ワンワン」と言いながらカンガルーの滑り台の後ろ側に回ったMを見て、「そっちに犬なんていないでしょう」と言う。ままごとの野菜（真ん中で半分に分けれる野菜）をそれぞれの手に持って打ち鳴らしている姿を見て、「そうじゃなくて二つに分けるの」と要求する。ゆったりと関わっている母親が多い中で、子どもの発達をよく理解していないのか、知育教育を行おうとしているのか、大変気になった人であった。このような場合、センターのスタッフはどこまで助言するのだろうか。

7月23日　13:30～15:30　　あいあい子育てルーム

4か月から2歳位までの子ども5名とその母親が参加。Kは実際に乗れる乗用車、トンネル、滑り台で遊ぶことを楽しんでいる。特に乗用車は大好きなようで誕生日に買ってあげたいと思う。ボールプールに他の子どもが入っている様子を見て、つい自分の子を入れてしまう（前回嫌がっていたが、同じ月齢程の子が喜んでいる様子だったため）。今回は泣かないものの、あまり楽しそうではないのでやめさせる。

スタッフが、お母さんよくやってるねという風に他の母親を認めている声が聞こえる。「レバーをもうあげてもいいんですか」とスタッフに質問する人もいる。

母親同士は、子ども同士が同じおもちゃや場所で遊び始めた時に、会話が始まることが多い。互いの子の年齢や名前、住まい（「お近くですか」「よく来るんですか」）を聞き合ったり、「かわいいですね」と褒めたりしながら会話の糸口を探している様子である。おもちゃの取り合いやぶつかった時など、互いの母親が「すみません」「どうぞ使ってください」等、気を遣いながら過ごしている。

ポ　ー　タ　ー　倫　子

8月19日　10:00〜11:30　　あいあい子育てルーム

1〜2歳児の母子が10組ほど参加。中に夫が日本人である上海出身の女性と夫が日本人のモロッコ人の女性がいる。今日は「幼稚園、保育所に通う子どもさんはご遠慮下さい」との貼り紙がドアにしてある。集団保育の子どもが数多く参加すると、今いる子どもたちが圧迫されることへの配慮だろうか。Kは滑り台を昇り降りし、私の支えで昇り、シルバーの方が下で受け止めて下さる。

一人の男児が私の膝におもちゃを置き遊び始める。「他のお母さんが好きなんですよ」とのこと。こういう声をよく聞く。また他の子どもをあやしたり、手をたたいて「おいでおいで」をする人もいる。子どもにとっては母親以外の人と交流する機会なのかもしれない。

「どれだけですか」「おいくつですか」という質問、「大きいですね」「もう○○できるんですか」「しっかりしてますね」という褒め言葉を互いに交わすことが多い。発達が気になる時（まだ歩けない）など、「もうすぐですよ」と母親同士励ます姿も見られる。

8月26日　14:30〜15:30　　あいあい子育てルーム

7カ月から3歳までの12組の母子が参加。Kは、3歳の女児たちがトランポリンでリズミカルに跳ねているのを見て、「あーあー」と嬉しそうな声を出しながら見ている。その後、トンカチでボール落としを力強くたたく。自分ができない代わりに、トランポリンで跳ぶようなリズムでトンカチを叩くことで類似体験をしているように思われる。年長の子どもの行動に刺激を受け、自分の中に取り込んでいるようである。

今日は思い切ってスタッフの保母さんに、断乳の時期と方法について相談をしてみる。育児書や育児雑誌に書かれていることがまちまちなので、第三者の声をいろいろ聞いてみたかったので。押しつけがましくなく、「こうじゃないかな」という風に答えて下さる。

9月3日　10:00〜11:20　　スマイルパーク

親子30組程が参加。中には母親同士が仲良しで一緒に来る姿も見かける。Kはプレイハウスに直行し、ドアを開けしめして出入りしたり、窓から覗くママとのいないないばあを楽しむ。しかし人数が多くなるにつれ、圧倒されてきたようで、外に出たがる。

子どもは、他の子どもがたとえ遊んでいてもおもちゃに引かれてやってくるため、ぶつかりあいや押し合いが生じるが、母親が「お友達使っているでしょう」「一緒に使おうね」など遠慮しあうため、トラブルは起こらない。

子どもたちは、様々な遊び場にぶらっと立ち寄りながら、自分の興味あるものを見つけているようである。いろいろな年齢の子どもが入り混じって遊んでいるため、例えば2歳児にとっては1歳児の予測のつかない行動（気の向くままプレイハウスに出入りする等）がじゃまになる時もあるし、遊びが持続しにくい状況である。しかし、これは家庭での兄弟遊びの中でも見受けられる状況であるし、一外に否定できないであろう。

3．子育てセンター担当保母への聞き取り調査

筆者は一母親として参加したため、第三者であり保育専門家であるセンターの担当保母の意見と突き合わせながら、子育てセンターの実際と課題を考察することが必要であると考えた。次に、それぞれのセンターの担当保母を対象に行った聞き取り調査の概要をまとめて報告する。

(1) 利用者について

「こどもらんど」と「あいあい子育てルーム」は一日の平均利用者数は50人前後、「スマイルパーク」は100人前後である。雨天日や雨上がりで地面がまだ濡れている日に利用者が多い。「こどもらんど」は金沢駅構内に設置されており、旅行の時間待ち等に利用されているため県外者も多い。3施設共に、自家用車や電車等で市外からやってくる人もいる。保育所の施設開放と並行しながら、いろいろな施設を渡り歩くことが最近の特徴のようである。

(2) 保育にあたるスタッフについて

公立保育所の所長・主任経験者が保母としてセンターの責任を担っている。シルバー人材センターより派遣されているベビーシッターは、子どもの世話が好きで、講演会等のイベントの時に、託児を任されている人だそうである。半日もしくは一日ずつ交替で勤務する。ベビーシッターの有資格者は3施設の中で1名のみで、事前のオリエンテーション等は開かれていないということである。中にはかなり高齢の方がいらっしゃるそうで、体力的に難しいのではという声が聞かれた。プログラムの質を充実させるためには、保育現場経験者を助手として採用して欲しいということであった。

(3) 参加する親子の様子について

子どもと遊ばない親や、友達とのおしゃべりに夢中で子どもを放っておく親が気になるとのことであった。子どもとどのように遊んで良いのか分からず、発達を促すための関わりができていない場合、助言することがあるそうである。例えば、はいはいが遅れている子の場合、前に進もうとする意欲につながるための関わり方の例を具体的にやってみせる等である。子どもは放っておいても何でもできるようになる（例：おむつが自然に取れるようになる）と思っている親もいるので、啓蒙が必要であるとのことであった。

甘やかしすぎて子どもを全然叱らない親、子どもに強くあたる親が気になるということであったが、親との信頼関係がある時には助言することもあるそうである。一度、「そういう風な教育方針じゃありません。構わないで下さい」と言われたことがあった。どこまで親の育児の仕

方に口を挟むべきか難しい問題である。

子どもの知育教育に関心のある親や、実際にそのような教室に通わせている親もいる。そういう場合、遊びの中でもいろいろなことを教え込もうとする様子が伺われる。

(4)　親同士の様子について

遊び場に参加している中で、友達になるケースはよくある。「あいあい子育てルーム」では、参加している人たちの中から自主的に声があがって育児サークルが一つ結成されたそうである。親たちは、子ども服、生活習慣、幼稚園や保育園等について情報交換をしているとのこと。中には「A園では子どもは傷をつくってくることが多い。B園の若い先生に怖い人がいる」等のうわさを耳にすることもあるため、現場経験者としてできるだけ正確な情報を流すようにフォローすることがある。

県外から転勤してきて友達がいなかったり、内向的な人に対しては、友達づくりの橋渡しをすることがある。気の合いそうな人同士や、子どもの月齢の近い人同士を紹介しあって、子どもの話題を中心に仲を取り持つことがある。一度周りの人と話す機会があると、次に参加しやすいため配慮している。

親同士の関わりの幼さが気になることがある。例えば、ある育児サークルの人たちが集団で参加して、派閥のような雰囲気をつくり、それ以外の人たちを居心地の悪い思いにさせたことがあった。また子ども同士のいざこざで、相手の親が自分の子どもを注意したことにかっとなって、怒って帰ってしまった人もいたそうである。自分の子どもがおもちゃを占領しているのに、知らぬ顔でさらに他の子が欲している別のおもちゃまで与えてしまった母親もいたとのことであった。

(5)　異年齢の子どもが参加することについて

プラス点としては、年下児が年上児を見習ったり、刺激を受けることがある。親にとっては、自分の子どもの将来の発達の姿がイメージしやすい。マイナス点としては、行動力の違いによって危険が生じたり、赤ちゃんにとって騒々しく落ちつかない環境になりやすい。

(6)　環境構成について

参加する子どもたちの発達年齢を考えると、あまり変化させるのは好ましくないため、ほとんど変えないようにしている。子どもの遊ぶ様子を見ながら、予算内で必要なおもちゃを買い足している。指導計画は作成していない。

(7)　子育て相談について

相談は、発育発達、生活習慣、育児法（しつけ)、入園についてが主な内容である。相談というより、雑談形式で話すことが多い。初めて来た人からは相談されることは少なく、顔見知りになることで心を開いて話してくれるようである。医学的な内容の場合は、保健婦を呼んできたり（保健所の場合)、専門家の助言が必要なケースの場合は、該当する機関を紹介することがある。

(8) 今後の課題について

子育てを負担に感じている親が多いので、できるだけ応援していきたいと考えている。このような施設を利用する母親は問題が少なく、むしろ一人で家に子どもと閉じこもっている母親の方が気掛かりである。若い母親の子育て不安に応じたり、アドバイザーとしての役割を果たしていきたい。

子どもと遊ぶことに意味を見いだせない親がいる。「なんで子どもと遊ばなきゃいけないのか」と考えている親に、それぞれの遊びが子どもの発達に果たす役割を具体的に伝えていきたい。又、最近の親は表情や感性に乏しく、子どもとの関わりが貧困であるように見受けられる。親を対象とした、研修会や講座をより頻繁に開催していく必要があるだろう。

その他「あいあい子育てルーム」では、利用人数が多いため、施設を広くして欲しいとのことであった。

V. 考　　察

以上の結果より、金沢市にある3つの子育てセンターが子どもと母親それぞれに果たす役割、今後の課題について考察する。

1. 子どもにとってどうであるか

雨天日に利用率が高いことから、晴れた日は公園や広場、雨の日は屋内施設を使いわけて利用しているようである。広いスペースは、狭い空間で生活している子どもにとって魅力であり、思い切って走ったり、はいはいできる場所となっている。家庭では設置できない大型遊具と出会え、全身を使ったりダイナミックに遊ぶ楽しさを味わえる。家にはない幅広いおもちゃと関わることができ、親はその様子を見て子どもの好む遊具を検討し、購入することができるため経済的である。

参加は0～2歳児が中心であるが、その中でも月齢によって発達にかなりの開きが見られるため、自分より上の子どもの動きや遊びの様子を模倣したり刺激を受けることが利点である。反面年上児にとっては、年下児の予想のつかない行動によって遊びを中断させられることがあり、集中して遊びにくい環境を生み出している。また行動力の違いから危険が生じたり、乳児にとって落ちつかない環境になっている場合もある。このような点を考慮しながら環境構成を点検していく必要があるだろう。

自由参加であるため、親はいつでも連れてこれるという気楽さはあるものの、毎回参加の人数やメンバーが変動するため、落ちついて遊びにくい。特に人数が多くなりすぎると遊びにくく、Kも遊び場から逃げだそうとすることが度々あった。東京青山の「子どもの城」の子育て支援プログラムのように、一定の範囲を登録制にすることも一つの方策である。人数調整をどのように図るかが今後の課題である。

母親以外のおとなと接する機会になっている。家庭で日中母親と一体一で生活していることを思えば、人間関係に広がりが生まれ、いろいろな個性を持ち、好意的に接してくれるおとなと出

会えるチャンスである。しかし母親が子どもの間に入り込むことによって、社会性が育ちにくいということも言える。一定の空間の中で過ごしていると、場所やおもちゃを媒介にいざこざが起こる。ぶつかったり、とりあいが生じた時に、母親は互いの母子に気を遣うため、「すみません」「一緒に使おうね」等と譲り合う姿がよく見られる。このような配慮は人間関係を円滑に運ぶために必要なことではあるが、トラブルを未然に防ぐように働きかけることで、子ども同士の真のかかわる姿が生まれにくいとも言えるであろう。

全体を通して、子どもは広々としたスペースで幅広い遊具に出会い、同年代の子どもや自分に好意や興味を示してくれるおとな（スタッフ、他の母親）と出会う機会を与えられるという点から、このような遊び環境は子どもにとってプラス要因が多いということが分かった。また後に述べるように、母親の子育てを支え、リフレッシュさせる機能を持つことから、子どもの育ちにプラスに働くことはいうまでもないであろう。

2．母親にとってどうであるか

「公園デビュー」という言葉が生まれたように、母親同士が互いを意識して付き合うことが現代の母親づきあいの特徴となっている。互いの子の名前や月年齢を尋ねることで話のきっかけを作ったり、良いところ（外見、発達）を褒めたり認めることで、好意的な関係を築きあげようとする姿が見られた。発達で悩んでいる母親と出会った時には、励ましたり自分の体験を語ったりする場面も見られ、育児仲間として互いを捉えている様子が伺われた。また互いの子どもをあやしたり、遊び相手になることもあった。母親にとっては、自分の子以外のいろいろな子どもと接することで、我が子を客観的に見つめ直す機会になる。また他の母親の子どもへの関わり方を見ながら参考にしたり、自分の関わり方を振り返る機会になる。いろいろな母親の姿に触れることが、理想の母親像に縛られている親の負担を軽減し、母親としての自分を受け入れやすくしているのではないだろうか。

友達と待ち合わせて一緒に参加したり、子どもを遊ばせながら他の母親との話に花を咲かせている姿が見られた。親子の遊び場を目的にしているが、おとなの人と雑談できる息抜きの場所を兼ねていることが分かった。「密室育児」という言葉が出現したように、子どもと二人だけの生活の息苦しさを感じている母親も多く、孤独な母親たちが育児を語り合える友人探しの場を提供している。

スタッフは子どものかわいいところや良いところをほめたり、母親の育児の大変さに共感し励ますことで、母親の育児態度を前向きなものへと方向づけている。子育ては評価が得にくい性質上、自分のやり方で良いのか不安を持つ母親が多い。スタッフは自分のやり方に自信を持てないでいる母親を後押ししたり、求められる場合には具体的な助言を与えたりしながら、親子の関係を見守っている。ある母親が筆者に、「いたずらをあまり禁止するとよくないそうね」と口にしたり、また別の母親が「こうすると早くはいはいするそうね」と示してくれたり等、しつけがマニュアル化しており、育児情報が一人歩きしている感も少なくない。一人ひとりにふさわしい育児のあり方は、子どもと親の中で創造されるものであることを伝えていかなければならない。さ

らに保母の指摘にもあったように「遊び方を知らない」「子どもと遊ぶことに価値を見いだせない」母親もいることから、子育てや遊びについての講習会等を頻繁に開催していくことがこれからの課題であろう。

3．その他の課題

聞き取り調査では、0～2歳児が安定して遊べるように、環境構成を変えることはほとんどないということであった。どのセンターも、対象となる子どもの月年齢に応じた幅広い遊具が設置されている。しかし今後とも親子の遊びの様子を観察しながら、人気のある遊具の数を増やしたり、必要な遊具を買い揃えていくことが必要である。特に「遊びの指導」を目的としていることを考えると、それぞれの発達にふさわしいものを吟味して選択するべきであり、十分な予算的措置が前提になってくるだろう。また家庭的な雰囲気を醸しだすために、敷物やテーブル等で落ちつける場所を用意したり、季節感の感じられるような装飾をしたり、子どもの作品を飾ったりすることで、より魅力的な遊び場空間が生まれると考えられる。

「あいあい子育てルーム」では、より広い場所を確保したいとのことであった。これは一日利用者が100人前後の「スマイルパーク」でも同様である。参加人数が多いため、子どもが十分遊びきれないという問題を抱えている。屋内遊び場を要求する声は非常に高く、特に自家用車のない人にとっては近所に徒歩で遊びに行ける場所を確保することは急務である。屋内遊び場を新設しなくても、廃園になった保育施設の跡地を活用したり、既存の保育施設、児童館や公民館の一角に乳幼児向けの遊び場を設けることは可能である。また民間企業に委託して、ショッピングセンターやデパートの一角に、質の高い遊び場を設置する方法もある。

子育て支援を必要とするのは、むしろこのようなセンターを利用せず家に閉じこもっている親子であるという意見があった。今後、子育て家庭の内、どのくらいの割合で利用されているか、なぜ利用しないかについて調査していく必要があるだろう。

Ⅵ．お わ り に

「育児支援」とは、「子育て支援」（育てる側への支援）と「子育ち支援」（育つ側への支援）の二面性を含めたことばである。汐見は、従来「子育て」支援は重視されてきたが、もっと「子育ち」支援を大切な原理にしなければ、子どもは親の恣意的な要求の犠牲になりかねないと述べている（1996）。そういう意味では、今回研究の対象となった子育てセンターの子どもと母親の利益は矛盾するものでなく、双方の「育ち」を支えることできる「育児支援」の本来の目的に立った施策であると言えよう。

引 用 文 献

Year book of Labour Statistics, 1992

梁井迪子「女性の社会進出と子育て支援ネットワーク」より孫引,『ＵＲＣ都市科学』, V28, 1996, p. 50―61

日本総合愛育研究所編,『日本子ども資料年鑑』第５巻, ＫＴＣ中央出版, 1996, p.87

汐見稔幸『子どもと教育　幼児教育産業と子育て』，岩波書店，1996

参　考　文　献

熱田恵美子「“子育て情報”をどう読むか』『児童心理臨時創刊』，1996，p.100－109
上田美穂「多様化する子育ての悩み」『児童心理臨時創刊』，1996，p.92－99
小野けい子「現代日本の母性意識－世代差と職業差の調査より」『発達』，N.57，V.15，1994，p.51－58
加藤欣子「「地域子育てセンター」の独立と充実を願う」『小児保健研究』，V.54，N.6，1995，p.645－648
金沢佳子『わが子がかわいく思えない』NHK出版，1993
川井　尚「「育児不安」これまでとこれから」『子ども家庭福祉情報』，V.10，1985，p.39－42
鯨岡　峻「子育て支援をめぐるいくつかの視点」『発達』，N.72，V.18，1997，p.1－10
こどもの城　保育研究開発部編『こどもの城　一緒に遊ぼう　楽しく子育て　――人ひとりが輝くために』，中央法規，1997
斉藤幸子「育児情報と親のニーズ」『子ども家庭福祉情報』，V.10，1985，p.43－45
清水玲子他『赤ちゃんがいるけど出かけたい　育児文化のいま』草土文化
仙田　満「子どものための住まいとあそび場」『子ども家庭福祉情報』，V.2，1991，p.23－25
日本総合愛育研究会　子ども家庭サービス教育・研究ネットワーク編「子ども家庭施策の動向」『別冊　発達21』，1996
前原澄子「働く女性への社会的支援」『公衆衛生』，V.59，N.6，1995，p.383－386
森田明美「働く母親をめぐる労働環境の変化と変わらない子育て責任」『発達』，N.57，V.15，1994，p.59－67
矢郷恵子編『なんでこんなに遠慮しなきゃならないの　160人のお母さんの声』，新読書社，1997

注1

例えば、平成8年度の人口動態社会経済面調査によると、理想子ども数より予定子ども数が少ない理由として、「育児の精神的負担が大きい」と答えた者は就業者の場合、7番目に多く14.6%に対し、無職者の場合3番目に多く25.0%であった。又、小野けい子の平成5年の松山市で実施した母性意識に関する職業差の調査においても、無職の専業主婦ほど「疲労と育児不満」が高いことが示されている。

謝辞

終わりにあたり、石川県の子育て支援の実態について貴重な資料を提供して下さったいしかわ子育て支援財団事務局長の中田久さん、聞き取り調査にご協力下さった金沢駅こどもらんどの出口外喜子先生、あいあい子育てルームの藤木美那子先生、スマイルパークの杉浦美帆子先生に厚くお礼を申し上げます。